

「きつ…貴様っ！」

な…何を堂々と入ってきてきているのだ!？」

「わあっごめんなさいっ!!(汗)」

…って、あれ…? …こっつて確か混浴ですよね!？」



客 クラマ  
(鴉天狗)

「か…関係ない!!」

乙女の柔肌を覗き見ようとする不届き者め!!」

「えええっ!?(汗)」

「…ん？ その姿…貴様人間か？」

…そうか、女将さんが言っていた

「ビトの客」というのは貴様の事か」

「そうですそうです！ 良かった、誤解が解けて…(ホッ)」



「ふむ…なるほど…」

話通り確かに良さそうなモノを持っているようだ…」

「…え？今なんて…？」

じらじらじら...

「フッフッフ...なるほどなるほど...♡」

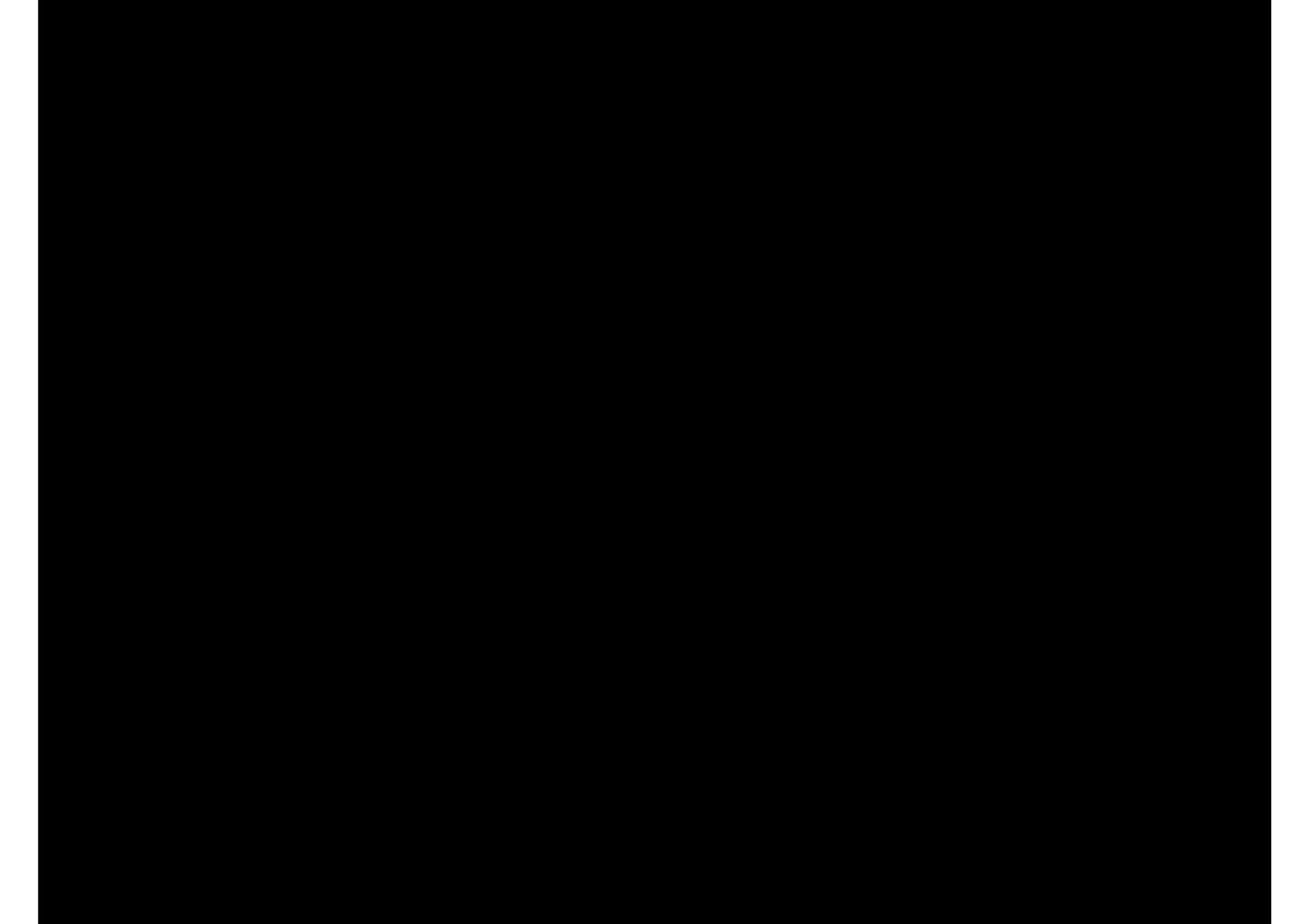


「あ...あの〜お姉さん?」

なぜそのようなお顔をされながら  
にじり寄ってくるのでしょうか...?」

「お姉さん...?」

お姉さんっ!?!」



「捕まえたぞ…♡これでもう逃れられまい」

むぎゆうゆう♡

「あああ…や…柔らかい…」

…じゃなくて!!

い…いきなりなんですか!?



「なんですかとは何だ！

貴様には私の裸を見た分、  
きつちりと対価を支払ってもらおうからな…♡」

「ええっ!? ほ…ほとんど服着てましたよね!?!  
それに今はご自分で胸をはだけさせてきたんじゃ…(汗)」

「ええいうるさい！」

男が細かい事をごちやごちやと言うな！！

貴様はおとなしく、

その上質な精を私に差し出せばいいのだ！！」

「——やっぱりそれが目的かー！！  
ってか本音駄々洩れてますけど！！(汗)」

「なに、貴様にとっても悪い話ではなからう？」

この鴉天狗クラマ様の乳房を味わえる人間など、  
貴様以外只の一人もおらぬのだからな♡」

むにゅむにゅ♡

「ああああ…確かにこの柔らかさはあ…」





「フッフッフ…♡」

「どうだ？ このように両の乳房に圧をかけたまま…」

むぎゅむぎゅむぎゅ…♡

「おおおっ」





「クスクス♡

私の中で貴様の陰茎がピクピク震えているのが  
伝わってくるぞ♡  
そんなに気持ちいいのか?♡

ず に ゆ♡ず に ゆ♡ず に ゆ♡ず に ゆ♡

「や…やばいです…

心地よい圧と柔らかさが満遍なく襲ってきて…

「…もう…」

「いいぞ♡ その辜丸にたっぷり溜まっている精液、  
思う存分私に吐き出すがいい♡」

ずにゆ♡ずにゆ♡ずにゆ♡ずにゆ♡ずにゆ♡

「ふ…ふへ… イきますっ!!」



ドピュッ ビュッ ビュルルルッ ♡

「んんんんん」

「あはっ ♡ 出た出た ♡ 物凄い量だな ♡」



「スーハー♡スーハー♡」

…むせ返るような臭いといい、濃さといい、  
確かに申し分ない精だな♡

これなら妖力の大幅な強化が期待できそうだ♡」

「はぁ…はぁ… じゃ、じゃあ…」

これで許してもらえますかね…?」

「何を言うか♥たった1回の射精分で、私の裸と釣り合うなどと思っているのか？

…貴様が女将さんから“精力即時回復”を付与されたのは知っているのだぞ♥」

ニヤア…♥

「や…やっぱりこうなるんですかあ!!(汗)」





ずりゅ♡ずりゅ♡ずりゅ♡

「どうだ？こうして乳房を交互に動かすのも、先程とは違った快感でまた気持ちよからう？」

「おごほおっ!? ちよっ…ちよまっ…

なんか…感度が!!(汗)」

ビクビクビクツ…!!



ずりゅ♡ずりゅ♡ずりゅ♡

「…フッフッフ♡ 気付いたようだな♡

そう、これこそが私の淫力“感度倍増”だ♡

貴様はこれからいつもの倍、

快感を得る事ができるのだ♡」

「そっ…そんな…あああああ〜〜!!」

ビクビク!!



ずりゅ♡ずりゅ♡ずりゅ♡

「…もっとも、射精直後で敏感になっている陰茎には  
倍どころの騒ぎじゃないだろうけどな…」

ん？どうだ？クスクス♡」

「も…もお…やめ…」

やめて…ええええああ!!(汗)」



ずりゅ♡ずりゅ♡ずりゅ♡

「遠慮することはないぞ♡衝動に身を任せ、

何度でもその甘露な白濁液を垂れ流すがいい♡

私が全て受け止めてやる♡」

「し… しゅらららら…

ぎもぢよすぎいで…ああああっっ!!」



ずりゅ♡ずりゅ♡ずりゅ♡

「…まあ こんな快感を味わってしまったのは、

もう二度と普通の性交などでは

達せなくなってしまうかもしれないがな♡

ほら♡もう限界だろう？♡我慢せず出すがいい♡

「い…イぐっ!!」





「ハア…ハア…♡…♡… 本当に凄いな貴様の精は♡  
妖力が満ち満ちてくるのが実感できるぞ♡

それにこの濃厚な雄の臭い…♡  
なんだか頭がクラクラしてきたぞ…♡」

「はあ…はあ… はあ…はあ…」



「ハア…ハア…♡ 駄目だ…まだ足りん…♡  
どうやら私も火が付いてしまったようだ♡

貴様の精がもつともつと欲しくて  
たまらなくなってしまうたぞ♡」

「はあ…はあ… そ… それって…(汗)」









「♡」

びゅるっ♡どびゅどびゅっ♡

「はぁ…♡はぁ…♡」

3回目だというのにまだこんな♡♡

濃度も先程よりも濃くなっているのではないか？

フフフフ…♡」

ビクンツ…ビクンツ…





「ほら♡ほら♡ 玉袋に残っているのを  
一滴残らず全部吐き出せ♡

貴様の子種は全て私の物だ♡  
あっはっはっはっは♡」

ずりゅ♡ずりゅ♡ずりゅ♡  
ずりゅ♡ずりゅ♡



ぴゅっ♡



どぴゅっ♡  
ぴゅるっ♡

…それからどれくらいの間が経ったのだろうか。  
気が付くと俺は全裸状態で脱衣場に倒れていた。

しこたま俺の精を絞り取った鴉天狗様は  
充分満足されたと見え、どこかに行ってしまっただようだ。

—とにかくお湯にゆっくりに漬かりたい

その「心で、俺は尋常じゃない倦怠感を抱えながらも、  
のそのそと洗い場へと歩を進めた。